

アコと人生…この人にインタビュー《第7回》「渡辺好子さん」

関東アコーディオン演奏交流会、合奏の部には連続出場していたのに、昨年ついに記録が途切れてしまい残念！とおっしゃる「鶴見アコーディオンクラブ」（通称TAC）所属の渡辺好子さんに、7月14日塚本実行委員長同席の下、最寄りの鶴見駅前の喫茶店にてアコとの出会いなどお話を伺いました。

□1944年群馬県中之条町で生まれる。1966年群馬大学卒業後、都内の公立小学校教員となり、千葉県我孫子に住んでいた姉のところから通うようになりました。

□7人兄弟で、2番目の兄が“歌う会”をやっている、日本のうたごえ祭典には中学生くらいから来ていたので、音楽センターにアコーディオン教室があることは分かっていました。きっかけは、教員になった年に子どもたちとアコーディオンで歌を歌えるといいなあ、子どもたちの前で動きながら使えるのでいいなあと思ったことで、音楽センターの東部教室に入りました。講師は清村杜夫先生でした。当時、初級の期間



は半年で、修了すると追いつけず出されてしまい、そこで、東部アコーディオンサークルに入りました。

(珍しいものを持ってきたと見せてくださったのは、当時使用していた音楽センター発行の伴奏集で、表紙を飾る上の写真中央の女性が本人とのこと) 楽器は、12月のボーナスで赤い中国製のアコを購入、学芸会で低学年の子どもたちの劇で使い、子どもたちも珍しがっていました。中級に通うようになったけれど、2年後に6年生を受け持つようになったら忙しく、通えなくなりやめてしまいました。

□15年ほどブランクがあり、1978年結婚とともに現在の横浜市鶴見区へ移り住み、二人の子どもを育てながら5年ほどたったとき、あるアコーディオンのホームコンサートに誘われました。それを機会に三人で鶴見アコーディオンクラブが発足し、半年ほどして仲間に入れてもらいました。発足当時から6年間は秋沢芳春氏に指導してもらいました。

□1990年、地元の病院にクラブのポスターを貼ってもらったところ、その病院に通院していた清村先生が偶然ポスターを見たことから秋沢氏の後を引き継ぐようになり、そんな偶然から22歳で初めて習ったときの清村先生の下で再び練習することになりました。先生が代わっても相変わらず忙しい生徒達で思うように練習はできませんでした。そんな中でも、関東アコーディオン演奏交流会の合奏の部には第1回から2006年度まで毎回出場していました。昨年度の合奏はメンバーの都合がつかなくて申し込むことができずついに連続出場が途切れてしまい残念です。

□現在、クラブのメンバーは6名です。クラブ発足当時の仲間に残っているのは自分ひとりになりましたが、仲間の輪を大事にとクラブのニュースを毎月出しています。苦にならないのは教員時代学級通信を出していたのが役に立っているのだと思います。退職してから練習量が増えたこともあって最近では独奏の楽しさ、面白さを感じています。退職後も年1回、教員の女性部主催の文化交流会で弾くのを楽しみに練習するようになりました。毎年うまくなったねって言われるのが励みになっています。

メンバーに保育園の園長がいるので、園の使える土曜日を基本に月2〜3回練習でき、19:00



から個人レッスン、20:00から合奏、21:00からお茶タイムのように練習会場にはとても恵まれています。一生続けられる趣味を持っているという思いもあり長く続けようと思っています。

(写真は今年80歳を迎えた「先生を祝う会」で演奏する渡辺好子さん) 《乙津:記》